平成 19 年 9 月 22 日
合同フォーラム
於：シムックス

中斎塾　合同フォーラム　第１回講話

今日は第一回の合同フォーラムです。
先ほど皆さんで論語の素読を致しました。実に氣持ちの良いものです。
中身についていくつかお話し致します。

「朋の遠方より来る有り。亦楽しからずや。」
まさにその通りで、東京フォーラムの皆様本当によくいらっしゃいました。

「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し。」
先日、東京フォーラム会員の山川さんから、京都での講演を依頼されて伺いました。
60 名の方が集っておられまして、レジメなしで話しを致しました。
骨格は、＜知識・見識・胆識＞についてです。
知識とは、過去・現在・未来を総合的に、知識として知って戴きたいとお話ししました。
過去の場合は、干支学で 60 年前の日本がどうであったかを調べて下さい。具体的には昭和 21 年 2 月 17 日付けの新聞を見て下さい。現在は、現在の状況をよく見るために、自分で情報をどれくらいとっているか、よくお考え戴きたい。未来は、ネバダレポートというものが 2004 年に国会で発表されていますから、それを調べて下さい。
見識とは当に、「学びて思わざれば則ち罔く・・」につながります。
知識をいくら集めても、ものにはなりません。単なる知識です。それを見識にする為には、本物の学問に触れることです。心のそこから“学びたい”“学ぼう”と思う心が、見識を生みます。ですから学ぼうと思う氣持ちのない方は、聞く必要はないと思っています。
胆識とは、腹構えが出来ていること。つまり、具体的な実行力がついたものを胆識と云います。
これは修羅場をくぐらないとなかなか肝が出来ません。現実の生活の場や現場の経営の中で揉みに揉まれて、修羅場を経験しなければ腹が練れません。腹を練る事によって、具体的な実行力がつきます。
・・・こういうお話を京都でさせて戴きました。

それは**「学びて思わざれば則ち罔く、思いて学ばざれば則ち殆し。」**を読むことによって広がって、京都でのお話しをさせて戴いたわけです。

「子曰く、利に放（よ）りて行えば、怨多し。」

これは私の大好きな言葉です。

目先の利益・欲望につられて飛びつくと、後で厄介事が起きます。

安倍首相は参議院選挙で惨敗をしました。

しかし自分は腹の中に、「これをやりたい」と思っていることがある。

これは目先の欲望であると私は思います。

又、その目先の欲望をくすぐる連中がいた。

だから参議院選挙で惨敗しても、辞めなかったわけです。

天下の流れ、時世の流れ、全体の流れから見ると、もう辞めざるを得ないところに来ているにもかかわらず、目先の欲望に引きずられて続投してしまったが為に、無様な辞め方をした。

その時にはもう体力が持たなくて、点滴にお粥で何とか身体を持たせていたのでしょうが、精根尽き果てて辞めた。

ですから、目先の欲に引きずられた時は、一国の首相だろうが会社の経営だろうが、皆同じです。

くれぐれも目先の欲にはつられないで行動するのが良いと思って下さい。

「子曰く、性相近し、習相遠し」

生まれ落ちた時は皆同じです。

スタートは皆同じですが、学ぶ習慣を身に付けると、どんどん変わって来ます。

学ぶ習慣を身に付けた人は、経営者になってどんどん進んでいっても、心が乾いてこない。

ところが学ぶ習慣を身に付けていないで、ただ儲けようと事業をしている会社の社長も、途中で心が乾いている事に氣が付く人が多いようです。

「果たして私の経営はこれで良いのか・・・」と自問するようになる。

同じようにスタートした人間でも、習う（学ぶ）習慣を身に付けているか否かで、氣が付くと距離が極端に離れてしまうものです。

では、従来通り質問を致します。

「昨日一日嘘をつかなかった方、手を挙げて下さい。」

・・・(半分手が挙がる)

嘘をついたかなと思ったら、今晩寝る時に思い出していただいて、反省すると良い。

嘘をつかなかった方は、ぐっすり眠ればよろしい。

そうすると、身体から良い分泌が出ます。

「昨晩寝る時に、明日が楽しみだと思って眠った方、どれくらいおられますか？」

・　・・(沢山手が挙がる)

手を挙げなかった方は、どうぞ自分の一日を振り返って下さい。

初めての方がおられますので、中斎塾フォーラムの目的を申します。

中斎塾フォーラムでは、「足るを知る心」を基本な考え方にしています。

あれもこれも欲張る、がっつく方が非常に多い。

あれも欲しい、これも欲しい、もっともっと・・・ばかりが多い。

先ほどの「利によりて行なえば、怨み多し」と同じです。

何を考えても、どういう行動をとる場合でも、自分の身の程を考えて「足るを知る」「ほどほどにしておこう」・・・という考え方で家庭生活、地域との関連、所属している組織体の中での活動をしていきましょう。

「足るを知る」という尺度で見たら、大分行動が変わるのではないかと思います。

環境問題も、がらっと変わった見方になってくると思います。

日本人の社会をそうやって眺めていったならば、他の国へ目を向けてみる。

そうすると、やはり拝金主義に毒されています。

ならば日本の中で一所懸命「足るを知る」という事を考え、実践していくことで、他の国にもそういったものを広げていければよいと考えて、活動しています。

それが結果的に、地球の絶滅を救える所につながるかなと思っています。

地球は今までに5回、大絶滅期を迎えたと言います。

最後の絶滅期は恐竜が絶滅した時ですが、それは隕石が飛んで来て地球に衝突した結果、気候変動が起きて絶滅をしたわけです。

つまり過去の絶滅期は皆、自然発生的なものです。

人間はその後生まれていますから、その比較的若い種が、地球を滅ぼしかねない。

先日軽井沢で、地球環境に関するディスカッションがあって参加しました。

エリザベット・サトゥリスさんという未来学者を中心にして、今の地球環境について、特にバクテリアの歴史と人類の歴史を比較しながらディスカッションをしました。

その中で私が印象的だったのは、二つあります。

一つは、「西洋の科学者は、世界が第六の絶滅期に向かって人類はスイッチを入れた、という認識で一致している」という点です。

もう一つは、「わたしたちは、精神的な経験ができる人間なのではなく、人間の経験ができる精神なのだ。」という言葉でした。

これは解説がありまして、「西洋の科学は、古来から東洋の宗教家・哲学者が自然と身に付けてきたこういう考え方を、やっと身に付け始めました。西洋と東洋はだんだん近づき出しました。」という発言がありました。

「知足」という考え方がは東洋だけのものではなくて、西洋も具体的な「知足」で始まりだしたという感じがします。

そういう基盤が、西洋でも出来始めたと思っています。

ですから私共が、中斎塾フォーラムで「足るを知る心」を追求し、良いと思われる行動を実践することによって諸外国に広げられる。

具体的には、地球環境問題ということで、広がっていると思います。

中斎塾フォーラムの目的をまとめます。

足るを知る・・・あまり欲をかかないでいきましょう。

それが日本民族を生き残らせる道であると思いますし、多分世界全体を見渡せば、そういう考え方が沢山どこの国にもあります。

それをもっともっと連携を取り合って広げていきましょう。

最終的に地球の絶滅を救うのではないか、という所につながると考えています。

では心に残る言葉をご紹介します。

本日は「ひらめきについて」がテーマです。

レジメをご覧下さい。

「ひらめき」とは何か。理屈を離れて、“あっ、さうだ”とわかる、その心の働きですが、それは、「綜合的直観力」と呼んでもいいものです。

『國の個性』木内信胤著　プレジデント社

人間は師匠を持つと、人間としての伸び方がぐんと違います。

師匠を持たないで独力だけで学んだ方は、伸びたとしても、どこかで師匠が欲しいと思う氣持ちになるようですし進み方が違うと、私は木内信胤先生にお会いして感じました。

木内信胤先生は、私が師匠と呼ばせて戴いた唯一の先生です。

先生は「自分の知識なんて、ほんの少しなのだよ。それをどこかで自覚すれば、まあまあものになっていくかな」と言っておられました。

先生はどんな事を質問されても、必ずきちんと答えるということを当たり前の習慣にしておられました。

私が先生に「先生はどこで悟りを持たれたのですか」と質問しますと、

「悟ったことを人には言えないのだよ。小さな悟りならば言えるけれど、口に出せないから悟りなのだ。長年疑問に思っていた事が　“ああ、そうか”　と分かる、腑に落ちたという心の動きは、小さな悟りなのだ。それが積み重なって、大きな悟りに到達する事がある・・・」と答えられました。

木内信胤先生の総合的直観力の背景には、

「今の世の中は何でも分析・分析していくから、わけが分からなくなってしまう。学問も、どんどん専門分野に分けている。これからの時代は、総合力を発揮しなければ学問は死ぬ」と言っておられました。

例えば経済学であれば、「経済学はもう終わり、ケインズはもう駄目だ」とかなり前から言っておられます。

「これからは分析する能力のある人間が世の中の役に立つのではなくて、分解し尽したものを、又、総合力で集めてきて、判断する能力を持った人間が必要だ。総合する力を持っている人間が、直感で閃いて「こうだ」と結論が出せるのだ。誰でも彼でも総合的直観力は身に付かないが、総合的に見ようという考え方がある限り、総合的直観力は身に付いてゆくものだ」と話されていました。

そういう閃き・インスピレーションとは、大体トイレだとか移動中に考え付くとか、寝る寸前に考え付くものです。

人間が閃く時は、枕上・馬上・厠上（眠る寸前、移動中、トイレの中）と言われます。

私はこれに、風呂の中も付け加えたいと思っています。

安岡先生は「書斎で一所懸命ものを調べたりしている時に閃きが起こるのではなく、公の場所ではない、ふっと氣が緩んでのんびりした時に起きる」と書かれています。

木内先生の逸話をいくつか申します。

先生は結構、人物評価もされました。

「あの子はなまじ総理大臣になったが為に、駄目だったねぇ。通訳をやっておれば良かったのに・・・」

あの子とは、宮沢喜一さんのことです。

終戦の時に、政府が経済復興の為の特別の委員会を作って、木内信胤先生が委員長になられました。
その委員会には、色々な省庁から若手の官僚が送り込まれてきたのですが、その中に大蔵省から通訳として送り込まれたのが宮沢喜一さんでした。

又、先生は総合的直観力で様々な予測もされました。
ベルリンの壁が崩壊する３ヶ月くらい前に、
「ベルリンの壁は政治的・歴史的な意味を終了しているから、あれはなくなるよ。せいぜい３ヶ月かそこらではないかね・・・」と言っておられました。
木内先生は、長期的な視野で見る・大局的に見る・本質をみる・・・という見方で、総合的直観力は生み出されて、ベルリンの壁崩壊が予測できたわけです。
これは大変なことだと思います。

木内信胤先生の総合的直観力を、私は是非、身に付けたいと思っています。
身に付けるための方法を考えてみました。
自分の周囲にあるものを、興味深く見続けることです。
興味の対象となったものは、自分が満足するまで見続ける。
それには興味の対象が生まれなければいけません。
興味を持った対象を、ずっと注意深く観察し続ける。
興味を持ったテーマを、ずっと考え続ける。
これを続けていくと、ある日突然、閃きが生まれます。
これは『カンの構造』という本に、説明が書いてあります。
総合的直観力とは、それほど難しいものではありません。
テーマを決めたら、ずっと考える続けること。
対象を見つけたら、それを注意深く観察し続けること。
これを繰り返していけば、真理（悟り）へ辿り着くことができる。
理論的に考えて、悟りに辿り着く人もいるでしょう。
しかしこれはほとんど無理なようです。
理論的に分析したものがずっと積み重なっていっても、最後の、悟りにいく部分は埋まらない、空白です。
理論的に解明できるものではないようです。
総合的直観力は、興味を持つ→考える、興味を持つ→考える、を繰り返していくと、知

識が非常に多くなる。
　その中で見識が生まれて、ある日突然、貯まりに貯まった「識」がバイパスを作って空白を埋めて、はっと悟る。
　これが悟りの構造です。
　木内先生はそれを、総合的直観力という言葉でそれを表現されました。
　今申し上げましたのは、『カンの構造』の中山正和さんという学者の説明を活用させて戴きました。

　自分でテーマを抱えたら、ずっと詰めて考えていくとはっと閃くことがありますから、その時は自分を信じればよいと考えております。
　最後に今日のまとめとして、「学ぶ」ということについて皆様に一つご紹介したいと思います。
　お手元にお配りしてありますので、ご覧下さい。

人、生まれて学ばざれば、生まれざると同じ。学びて道を知らざれば、学ばざると同じ。知って行うと能わざれば、知らざると同じ。故に人たる者は、必ず学ばざるべからず。学をなす者は、必ず道を知らざるべからず。道を知る者は、必ず行わざるべからず。道を知ることは至りて難し。

『慎思録』（貝原益軒著）講談社学術文庫

　せっかく人として生まれてきたのだから、学ばなければいけない。
　学ぼうと思って学んだ結果、人間としての道を知らない人は、学ばなかったと同じである。
　知っていると思い人さまに言っても、実行しなければ、知らないより悪い。
　人間とは、学ばなければいけない。
　学ぼうと思う人は、必ず人としての道を知りたいと思わなければいけない。
　人としての道を知ったと思う者は、必ず実行しよう。
　なかなかこの道は難しいが、是非進んで貰いたい道である。

　本日は以上で終了致します。有難うございました。
　次回は、山田方谷『理財論』を申し上げたいと思います。